

# 戻ってきた独裁者 遅れてきた独裁者

作

邑古宙道

邑仲宙道

(中村道彦)

初版版2023年3月

改訂版2025年1月

**①**歴史と文化を誇るヘリアンサス国の隣国にメドヴェーチ国という大国がありました。メドヴェーチ国の大統領ウラデミール・プーリンは肥沃な土地の領有と西方諸国との通商路開設のため、隣国のヘリアンサスが欲しくてたまりませんでした。そこでプーリン大統領はヘリアンサスを独裁国家といいがかりをつけ、その独裁政権によって非人道的な扱いを受けているヘリアンサス国内のメドヴェーチ人を救済するという大義名分の下に軍を派遣しました。突然の軍事侵攻にヘリアンサスの国民は大統領ヤロスラーヴと一丸となってメドヴェーチ軍と戦いました。当初は数か月以内に決着がつくとプーリン大統領は考えていましたが、ヘリアンサス兵の戦意は高く、さらに一方的な侵攻に異を唱える西方諸国もヘリアンサスに経済的・軍事的な援助を行い、この攻防戦は数年にもわたりました。このためヘリアンサスの大地は荒廃し、多くの国民や兵士が亡くなりました。

**②**激しい戦闘の続くヘリアンサス東部の田舎町に、ジトヌイールという名の農夫が住んでいました。彼は1952年10月2日生まれで今年72歳になりますが、これまで独身を通しています。静かで穏やかな暮らしを続ける中で、10年前に離婚して出戻ってきた妹のリュボスラーヴァと二人で暮らしています。妹には一人娘があり、この娘夫婦は二人の子どもと別の村で生活をしています。妹の娘と孫たちが時々、ジトヌイールを訪ねてきて楽しい時間を過ごすこともありました。兄と妹は広々とした麦畑を耕し、夜は質素な食事を摂りながら互いに労わりながら過ごしていました。その生活も2年前のメドヴェーチ軍の侵攻で麦畑は焦土となり、家はかろうじて残りましたが、二人の静かで満ち足りた生活は失われてしまいました。

**③**戦禍でそれまでとは一変した生活を強いられたジトヌイールには、もう一つの悩みがありました。それは彼がヘリアンサス侵攻を企てた張本人プーリン大統領に瓜二つだったことです。顔や背丈だけでなく、出生年月も同じで、まるでジトヌイールとプーリンは双生児のようでした。このためジ

トヌイールを初めて見た人はアッと息を呑んで目を伏せてしまいました。子どもたちはジトヌイールを「ディアヴォル・プーリン(悪魔のプーリン)」と呼んではやし立てるのでした。彼の家には「悪魔のプーリン、ヘリアンサスから出ていけ！」などの落書きをされ、彼の持ち物にも「悪魔のプーリン」と落書きをされました。

④ そんなある日、ジトヌイールが食料の買い出しに近くの町に出向きました。町までの一本道をいつものように馬車を走らせていますと、道端の藪から5名のメドヴェーチ兵士が突然、現れました。彼のおずおずとした様子を不審に思った兵士が馬車を止め尋問を始めました。彼のバッグには僅かな現金と孫に宛てた手紙が入っていました。メドヴェーチ兵は現金を奪い、ジトヌイールをそのまま行かせようとしたのですが、彼の買い物籠に「悪魔のプーリン」と書いてあることに気付きました。すると兵士の態度は一変して銃を彼の額にあて、反プーリン主義者かと詰問してきました。正直者のジトヌイールは「そうではない。」と即座に返事をする事もできず黙ってしまいました。兵士は何度も同じ質問をし、ジトヌイールは唯黙秘をするばかりでした。

⑤ 一人の兵士がジトヌイールを射殺しようと銃を構えました。彼は覚悟を決め目をつむりました。と、別の兵士が叱責するような厳しい声で銃を構えた兵士を制しました。どうやらこの兵士は銃を構えた兵士の上官のようでした。上官の兵士は彼を隊まで連行して反対勢力の状況を聞き出すように命令をしました。ジトヌイールは馬車から降ろされ、両手を後ろ手に縛られ、銃で小突かれながら藪の中に引き込まれていきました。背丈ほどもある藪の中をしばらく歩き、別の道に出ました。そこには10数台の戦車が道沿いに並び、銃を構えたメドヴェーチ兵が数人ずつ集団をつくり、周囲を警戒していました。

⑥ ジトヌイールは2人のメドヴェーチ兵に連行されてこの道を進みました。そこへメドヴェーチ軍の高官専用車に乗ったグーフィ将軍が通りかかりました。将軍は連行されている農夫の顔を見て血相を変え、直ぐに車から降りてきました。

その農夫の前に来て、農夫の顔を覗き込むように見て、再び飛び上がらんばかりに驚き、農夫に最上級の敬礼をしました。

「私はヘリアンサス東部占領軍司令官であります。大統領閣下がお忍びで東部軍を激励のためお出でになることはうかがっておりましたが、このような農夫の姿をしてお見えになるとは想像もしておりませんでした。これからは東部軍が全力でお守りしますのでご安心ください。」とみすぼらしい農夫に話をしました。そして連行していた兵士に將軍の専用車で兵舎までお連れするよう命じました。

⑦農夫は何が起こっているのかわからぬままに東部占領軍の立派な兵舎に案内され、美しい軍服と沢山の勲章を渡されました。やがてゲーフィ將軍が数名の立派な上官を連れて兵舎に現れ、それぞれがジトヌイールに最敬礼をして挨拶をしました。その後、にわか大統領は軍用車に案内され、東部占領軍の戦意高揚のため閲兵を依頼されました。ジトヌイールは言われるままに車座席に立ち、兵士たちに笑顔で手を振りました。ジトヌイールが通るたびに兵士は一斉に「ウラー、ウラー」と歓声をあげました。

⑧一方、メドヴェーチ国の大統領プーリンは少数の護衛兵と共に、国境を越えていました。この領域はメドヴェーチ軍が占領支配していましたが大きな危険はないと考えられていました。ヘリアンサスに入ればしばらくすると山頂に潜んでいたヘリアンサス軍のゲリラ部隊からバズーカ砲の攻撃を受け、プーリン大統領の乗る車は道端の溝に転倒しました。車の前後で護衛していたメドヴェーチ兵は山頂に向けて応戦しましたが、敵の姿が見えずどこからともなく飛んでくる銃弾にメドヴェーチ護衛兵は次々と倒れてしまいました。プーリン大統領の乗る装甲車のような車は大破しませんでした。車内の運転手や腹心の上官2名はプーリン大統領を守ろうとして荷物の下敷きになり落命しました。プーリン大統領はそのお陰で軽傷を負うだけで車から逃げ出すことができました。プーリン大統領が脱出した直後に車は大きな爆発音とともに炎上しました。

⑨プーリン大統領は焦げた服をまとい、見知らぬ小道をふ

らふらと歩いていました。そこにメドヴェーチ軍の部隊がやって来ました。部隊長は東部司令官からプーリン大統領が既に東部軍に到着したことを聞いていたので、道をふらついていた男がプーリン大統領とは気づきませんでした。その男は泥まみれの顔で破れた服を身に着けた避難者にしか見えませんでした。しかしこの男は尊大な態度でメドヴェーチ大統領のプーリンだというので、最初は笑って聞き流していましたが、男があまりに無礼な言動を繰り返すため、部隊長はとうとう腹を立ててしまいました。そして「貴様は自分が大統領閣下に似ているのを良いことにメドヴェーチ軍を欺こうとするのは誠にけしからん。よって逮捕監禁する。」と言って兵に逮捕させました。

⑩メドヴェーチ大統領となった農夫ジトヌイールは東部軍を激励する原稿を渡され、数千の兵士の前で演説をしました。その夜にジトヌイールは密かにメドヴェーチ国の大統領官邸に戻りました。この間、ジトヌイールは自分が偽の大統領であることがいつばれのるかとびくびくしていました。しかし幸いなことに誰も気づくことがなく、ジトヌイールも少し落ち着いてきました。そこで彼は一計を案じ、大統領のふりをすることに決めました。何日か経ち、ジトヌイールは大統領府の主要閣僚を集めて話をしました。「ヘリアンサスへの軍事侵攻も1年以上になり、メドヴェーチ国民も兵士も疲れてきておる。このままだとわが国も疲弊してしまいかねない。そこでこの軍事侵攻を中止して軍をメドヴェーチ国境まで下げようと思うが、皆はどう思うかね。」と尋ねました。閣僚は自分の耳を疑いました。今まであれほど強気だった大統領が軍を引くとは考えられなかったからです。それで口々に理由を尋ねました。大統領は「皆も承知の通り、メドヴェーチ国は大きな経済的負担を抱え、世界からも批判されて孤立し、わが国の多くの若者が戦地で亡くなっている。このままだとメドヴェーチ国の繁栄ある未来はみえない。世界の大国メドヴェーチ国を引き換えにしてまで軍事侵攻を続ける意味があるだろうか。」

⑪大統領の真摯な態度に多くの閣僚は心の中で納得し、安

心もしました。一部の閣僚には不満があったようですが、大多数の閣僚が賛成し、結局、反対派の閣僚は口をつぐんでしまいました。いつも暗く重い雰囲気の中の閣僚会議が、霧の晴れたように澄んだ明るい雰囲気になりました。大統領はさらに続けて話しました。「軍事侵攻を終わらせるにあたって、だれも責任をとらないわけにはいかないだろう。そこで私は大統領としての責任を裁判で問い、裁かれないと思う。そしてどれほど重い刑であっても受けるつもりだ。」再び、閣僚たちは驚きました。「大統領が一人でこの軍事侵攻の責任をとるのですか。」と何人かの閣僚が尋ねました。大統領は「そうだ。大統領としての強い権限には大きな責任を伴う。私は勇気ある人間ではないが、決して卑怯な人間にはなりたくはない。」と答えました。

⑫会議が終わり、大統領は側近に軍の退去と大統領の裁判の準備を命じました。側近の中でも最も大統領の信頼を得ている長官を呼び、次のように命じました。「よいか、メドヴェーチの刑務所に私そっくりの容顔で自分が大統領だと言っている男が収容されている。裁判では私の代わりにその男を裁判に出して裁きを受けさせるのだ。この裁判は世界に公開して、大統領の犯した罪を世界中に伝え、世界中の裁判官に判決をゆだねるのだ。わかったか。」長官は静かに同意して部屋を下がりました。長官は腹の中で「大統領は立派な宣言をしてもやはり逃げのうまい卑怯な人間にすぎん。」と苦笑いしていました。

⑬大統領の裁判で判決がプーリンに不利になりそうに思えてくると、この男はそれまで「自分はプーリンだ。」と執拗に訴えていたのに、突然「自分は大統領ではない。人まちがいだ。」と叫びだしました。そこでこの男の指紋やDNA検査が行われましたが、疑いもなくプーリンであることが証明され、彼の主張は通らず、この場に及んで見苦しいと嘲笑の的になりました。ジトヌイールは密かに母国に戻り、ヘリアンサスの大統領ヤロスラーヴに一部始終を話しました。ヤロスラーヴ大統領は、メドヴェーチの新たな大統領と共に、二つの国の再建のため、協力することを約束しました。

そして満月が白々と照り続けるメドヴェーチの夜空に「おれはプーリンではない！」という叫び声が響き渡りました。

さて、これは作り話です。でも平和を願う気持ちは作り話ではありません。平和を願う気持ちが世界中の人に湧き上がれば、この作り話は本当の話になります。夢をかなえる魔法はいつも私達の手の中にあります。